



# ファリサイ派と律法学者への禍いの言葉：ルカ 11:37-54の釈義的考察

著者	嶺重 淑
雑誌名	関西学院大学キリスト教と文化研究
号	22
ページ	35-55
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029453">http://hdl.handle.net/10236/00029453</a>

# ファリサイ派と律法学者への禍いの言葉

——ルカ11:37-54の釈義的考察——

嶺 重 淑

## 序

新約聖書の福音書においては、ファリサイ派と律法学者は総じてイエスに敵対する集団として描かれており、両者はしばしば共働する集団として登場し（マコ7:1,5; マタ12:38; ルカ5:21,30; ヨハ8:3他）、箇所によってはほとんど一体化して捉えられている（マコ2:16; マタ5:20参照）。しかしながら、とりわけルカ福音書においては両者は単純に同一視されておらず、それぞれの集団は並列されつつもそれぞれに特徴づけられ、区別して捉えられている<sup>1</sup>。このようにルカが両者を区別して捉えていたことは、マタイ23章ではファリサイ派と律法学者に対する一連の非難の言葉が一括して述べられているのに対し、並行するルカ11:37-54では両者に対する非難の言葉が明確に区別されて述べられていることから確認できる。

そこで本稿ではこのルカ11:37-54を取り上げ、テキストの厳密な釈義を通して、ファリサイ派と律法学者それぞれの特徴を確認すると共にこのテキストの主眼点を考察していきたい。

---

1 嶺重淑『ルカ福音書 1章~9章50節』、日本キリスト教団出版局、2018年、223-224頁。さらにルカのファリサイ派の特徴については拙著『ルカ神学の探究』、教文館、2012年、170-189頁、律法学者の特徴については拙論「イエスと律法学者——ルカにおける「教師」イエス像」、辻・嶺重・大宮編『キリスト教の教師——聖書と現場から』、新教出版社、2008年、60-76頁を参照。

## 1. 私訳

11:37 さて、彼（イエス）が語っていた時、あるファリサイ派の人物が自分のところ（家）で食事をしてくれるように彼に頼んだ。そこで彼は〔その人の家に〕入って行って〔食事の〕席に着いた。38 ところがそのファリサイ派の人物は、彼が食事の前にまず〔手を水に〕浸さなかったのを見て驚いた。39a しかし主は彼に言った。b「実に、あなたたちファリサイ派の人々は杯や皿の外側は清めるが、あなたたちの内側は強欲と悪に満ちている。40 愚か者たちよ、外側を造られた方は内側も造られたではないか。41 むしろ、〔器の〕内にあるものを施しとして〔人に〕与えなさい。そうすれば見よ、あなたたちにとってはすべてのものが清くなる。42 しかし禍いだ、あなたたちファリサイ派の人々は。あなたたちは薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一税は献げるが、正義と神への愛は無視しているからだ。しかしこれらのことを行うべきである。〔もとより〕前者（十分の一の献げ物）も軽視してはならないが。43 禍いだ、あなたたちファリサイ派の人々は。あなたたちは会堂の最上席と広場での挨拶を好むからだ。44 禍いだ、あなたたちは。あなたたちは目に入らない墓のようなものだからだ。そしてその上を歩いている人々は〔そのことに〕気づかない」。

45 そこで律法の専門家たちのある者が答えて、「先生、そんなことをおっしゃると、あなたは私たちをも侮辱することになります」と彼に言う。46 すると彼（イエス）は言った。「あなたたち律法の専門家たちも禍いだ。あなたたちは人々には背負いきれない重荷を負わせながら、あなたたち自身は自分たちの指一本もその重荷に触れようとしないからだ。47 禍いだ、あなたたちは。あなたたちは預言者たちの墓を建てているからだ。だが、あなたたちの先祖が彼らを殺したのだ。48 こうしてあなたたちは自分たちの先祖の〔数々の〕所業の証人となり、それに同意している。一方で彼ら（先祖）自身は彼ら（預言者たち）を殺し、他方であなたたちは〔彼らの墓を〕建てているからだ。49 このため、神の知恵もこう言った。『私は彼らの中に預言者たちや使徒たちを遣わす。しかし彼らはそのうち〔のある者〕を殺し、迫害する』。50 こうして、世界の初めから流さ

れたすべての預言者たちの血について、この時代から〔代償を〕要求されることになる。51〔それは〕アベルの血から、祭壇と神殿の間で殺されたゼカリヤの血にまで及ぶ。そうだ。私はあなたたちに言うておくが、この時代から〔代償を〕要求される。52 禍いだ、あなたたち律法の専門家たちは。あなたたちは知識の鍵を取り上げ、あなたたち自身は入らないし、また入ろうとする人々をも妨げたからだ。53 そしてそこから彼（イエス）が出て行くと、律法学者たちやファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、様々なことで彼に質問を浴びせ始め、54 何か彼の言葉じりをとらえようと彼を狙っていた。

## 2. 文脈と構成

この段落はルカのエルサレム旅行記事（9:51-19:27）の前半部に位置づけられ、エルサレム途上の出来事として語られているが、その点、並行するマタイ23章がエルサレム入城後のイエスの神殿での一連の教え（マタ21:23以下）に位置づけられているのとは明らかに異なっている。また、この段落においてルカ11:17以降の一連のイエスの教えは締めくくられるが、ここまでは群衆に対して語られてきたのに対し（11:14,29参照）、ここではファリサイ派と律法学者に向かって語られている。

ルカのテキストはまた、導入部（37節）の「入って行く」（εἰσελθὼν）と結部（53節）の「出て行く」（ἐξελθόντος）という対応表現によって枠付けられ、あるファリサイ派の人物の家での会食の場面を構成している。冒頭の清めに関する対話（39-41節）のあとにはファリサイ派と律法の専門家に対するそれぞれ三つの禍いの言葉（42-44節及び46-48,52節）が続いているが、両者はある律法の専門家による発言（45節）によって相互に区分され、神の知恵による証言とこの時代への裁きの告知（49-51節）を除けば対照的に構成されている。この段落の各構成要素はまた、τὰ μνημεῖα（44節／47節）、οἰκοδομέω（47節／48節）、ἀποκτείνω（47節／48節）、προφηταὶ（47節／49,50節）、αἶμα（50節／51節）等の語によって相互に結びついている。この段落全体は以下のように区分できる。

- (1) 序：状況設定 (37-38節)
- (2) 内側と外側の清め (39-41節)
- (3) ファリサイ派の人々に対する禍いの言葉 (42-44節)
  - (a) 第一の禍いの言葉：十分の一税に優る正義と神への愛 (42節)
  - (b) 第二の禍いの言葉：名誉心 (43節)
  - (c) 第三の禍いの言葉：見えない墓 (44節)
- (4) 移行句：ある律法の専門家の反論 (45節)
- (5) 律法の専門家たちに対する禍いの言葉 (46-52節)
  - (a) 第一の禍いの言葉：負担の強要 (46節)
  - (b) 第二の禍いの言葉：預言者たちの墓の建造 (47-48節)
  - (c) 神の知恵による証言とこの時代への裁きの告知 (49-51節)
  - (d) 第三の禍いの言葉：知識の鍵の没収 (52節)
- (6) 結び：イエスの退去と律法学者とファリサイ派の敵意 (53-54節)

### 3. 資料と編集

冒頭の37-38節はマタイに対応箇所は見られず、直後の39節から主題が祭儀的清めから容器の清めに移行していることから二次的に付加されたと考えられる。ここには「歴史的現在」の用法等の非ルカの要素も認められるが<sup>2</sup>、伝承に由来するとは考えにくい。むしろここには多くのルカの語彙が含まれ<sup>3</sup>、会食の場面もルカに特徴的である (5:29以下; 10:38以下; 19:6以下他)。特にイエスがファリサイ派の人物から食事に招かれる場面を描く福音書記者はルカのみであり (7:36

2 H. J. Cadbury, *The Style and Literary Method of Luke*, Cambridge 1920, pp. 158-159; J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, pp. 205-206; J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I-IX* (AB 28), New York 1983, p. 107参照。

3 <ἐν τῷ + 不定詞>は新約用例52回中ルカ文書に39回使用、定冠詞を伴う不定詞は新約用例303回中ルカ文書に121回使用、共観福音書用例107回中ルカに70回使用、ἐρωτάωは同22回中15回使用、ἀνατίπτωは同7回中4回使用。

以下; 14:1以下)、とりわけ37節とルカ7:36は文章構造において近似している<sup>4</sup>。さらに、ルカがその並行箇所でも割愛したマルコ7:1-23 (特に7:1-5) とルカ11:37-39は、ファリサイ派らとの会食、祭儀的な手洗いや容器の清めのモチーフの他、*ἔξωθεν* – *ἔσωθεν* (マコ7:15, 18, 21 / ルカ11:39, 40)、*πομπρία* (マコ7:22 / ルカ11:39)、*καθαρίζω* (マコ7:19 / ルカ11:39) 等の要素を共有していることから、ルカはマルコ7:1-5との関連から37-38節を編集的に構成したと想定できる<sup>5</sup>。

ファリサイ派の人々と律法学者たちに対する一連の禍いの言葉 (39-52節) は、次頁の表に示すように、ルカの編集句と見なしうる45節を除いてマタイ23章に対応箇所がみられることから、総じてQ資料に遡ると考えられ<sup>6</sup>、すでにQ資料の段階で直前の11:33-36と結合していたのであろう<sup>7</sup>。もっとも、マタイ版においては律法学者とファリサイ派の両者に対する計七つの禍いの言葉 (マタ23:13, 15, 16-22, 23-24, 25-26, 27-28, 29-32) が列記されているのに対し、ルカ版では両者は明確に区分され、各集団に対して三つの禍いの言葉が語られており、双方のテキストに共通する禍いの言葉は四つのみで (42節 // マタ23:23, 44節 // マタ23:28, 47-48節 // マタ23:29-32, 52節 // マタ23:13)、マタイ23:2-3, 5, 8-12, 15-22, 24, 33に対応する箇所はルカには見られない等、両テキストは内容や順序、語彙や文体においてかなり相違している。多くの研究者はルカ版の方が原初的と考えているが<sup>8</sup>、双方の福音書

4 Jeremias, op. cit., p. 205.

5 D. Lührmann, *Die Redaktion der Logienquelle* (WMANT 33), Neukirchen-Vluyn 1969, p. 44; J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke X-XXIV* (AB 28A), New York 1985, pp. 943-944; D. Kosch, *Die eschatologische Tora des Menschensohnes. Untersuchungen zur Rezeption der Stellung Jesu zur Tora in Q* (NTOA 12), Freiburg Schweiz/Göttingen 1989, pp. 63-73; J. Nolland, *Luke 9:21-18:34* (WBC 35B), Dallas 1993, p. 663; H. Schürmann, *Das Lukasevangelium*, II/1 (HThK III/2/1), Freiburg/Basel/Wien 1994, pp. 308-309; F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, II (EKK III/2), Zürich/Düsseldorf/Neukirchen-Vluyn 1996, p. 220.

6 R. プルトマン『共観福音書伝承史I』加山宏路訳、新教出版社、1983年、192-194頁参照。

7 G. Schneider, *Das Evangelium nach Lukas*, II (ÖTK 3/2), Gütersloh 1984, p. 274.

8 Kosch, op. cit., pp. 84-92; I. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Michigan 1995, p. 492; Bovon, op. cit., p. 221; D. ツェラー『Q資料註解』今井誠二訳、新教出版社、2000年、122頁; U. ルツ『マタイによる福音書 (18-25章)』小河陽訳、教文館、2004年、381頁; G. Hotze, *Jesus als Gast. Studien zu einem christologischen Leitmotiv im Lukasevangelium* (Forschung zur Bibel 111), Würzburg 2007,

記者が編集の手を加えていると考えられ<sup>9</sup>、その原初形を再構成することは不可能である。事実、マタイとルカのあらゆる相違点を両者の編集作業から説明することはできず、マタイ特殊資料<sup>10</sup>や二つの異なるQ資料<sup>11</sup>の存在も想定すべきであろう。なお、これらの禍いの言葉の中にイエスの真正の言葉が含まれている可能性も十分に考えられる<sup>12</sup>。

### 【ルカ11:37-54とマタイ23:1-36の対応表】

ルカ	主 題	マタイ
ルカ11:37-38	導入句	cf. マタイ23:1 (マルコ7:1-5参照)
ルカ11:39-41	外側と内側の清め	マタイ23:25-26⑤
ルカ11:42	十分の一税①	マタイ23:23④
ルカ11:43	第一の座と挨拶②	マタイ23:6-7 (並行マルコ12:38b-39)
ルカ11:44	墓③	マタイ23:27 (28) ⑥
ルカ11:45	(移行句)	——
ルカ11:46	重荷④	マタイ23:4
ルカ11:47-48	預言者の墓⑤	マタイ23:29, 31 (32) ⑦
ルカ11:49-51	預言者の迫害とこの時代への裁き	マタイ23:34-36
ルカ11:52	鍵⑥	マタイ23:13 (天国の門の閉鎖) ①
ルカ11:53-54	(結部)	——
		cf. マタイ23:15②、マタイ23:16-22③

内側と外側の清めに関する言葉（39-41節）はマタイ23:25-26に対応しているが、マタイ版とは異なり、禍いの言葉の形式をとっていない等、両者間には多くの相違点が見られ、おそらく統一的に構成されているマタイ版の方がQ資料の内容を

p. 182参照。一方でSchürmann, op. cit., pp. 330-331はマタイ版を原初的と見なしている。

9 H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 425参照。

10 T. W. Manson, *The Sayings of Jesus*, London 1954, p. 96; ルツ、前掲書、350,380頁; W. Eckey, *Das Lukasevangelium. Unter Berücksichtigung seiner Parallelen*, II, Neukirchen-Vluyn 2004, p. 547.

11 Marshall, op. cit., p. 493; さらにKosch, op. cit., pp. 61-92; Schürmann, op. cit., pp. 330-335; ルツ、前掲書、380-382頁; Hotze, op. cit., pp. 180-184参照。

12 E. シュヴァイツァー『マタイによる福音書』佐竹明訳、NTD新約聖書註解刊行会、1978年、591頁; Schürmann, op. cit., pp. 330-334; Marshall, op. cit., p. 493.

保持していると考えられる。冒頭の39a節は多くのルカの表現を含んでおり<sup>13</sup>、ルカの編集句であろう。39b節は総じてマタイ23:25bに対応し、Q資料に由来する。もっとも *οὐκ* (実に) はおそらくルカの編集句であり (共観福音書用例21回中ルカに14回、さらに使に25回使用)、ルカは39-41節が会食の場面に適合していることからここに位置づけ、さらにその会食の場面設定 (37-38節) にスムーズに接続させるため、*οὐαὶ ὑμῖν* を *οὐκ* で置き換えたのであろう。マタイに並行箇所が見られない40節 (トマス89参照) については、マタイがこれを削除する理由が確認できないことからQ資料に由来するとは考えにくく、むしろここには複数のルカの語彙が認められることから<sup>14</sup>、ルカによる編集的構成と考えられる<sup>15</sup>。マタイ23:26に並行する41節はQ資料に由来すると考えられるが、マタイ版ではなお容器の清めが話題になっているのに対し、ルカ版では施しが要求される等、ルカの特徴が認められることから<sup>16</sup>、最終的にはルカが施しの要求の観点から編集的に構成したのであろう<sup>17</sup>。

最初の禍いの言葉 (42節 // マタイ23:23) は総じてQ資料に由来すると考えられるが、マタイ版では内側と外側の清めの言葉に先行しており、Q資料においても同様であったと考えられる<sup>18</sup>。43節はマタイ23:6-7のみならずマルコ12:38b-39にも並行しているが、マタイがここでマルコとQ資料の両者を用いているのに対し、ルカはマルコの記述をむしろ後出の20:45-47で記述していることからQ資料に由来すると見なしうる。マタイ23:27に対応する44節もQ資料に由来す

13 *εἶπεν* *δέ* は新約ではヨハ12:6を除くとルカ文書にのみ計74回使用、《言述の動詞 + *πρός* + 対象を示す対格》は新約用例169回中ルカ文書に149回使用、イエスを意味する絶対用法の *ὁ κύριος* は共観福音書ではルカにのみ15回使用。

14 *ἄφρων* は共観福音書ではことルカ12:20にのみ使用、神の創造を表す *ποιέω* は使4:24; 14:45; 17:24,26にも使用。

15 Kosch, op. cit., pp. 107-108; ルツ、前掲書、400頁; 川島貞雄『聖書における食物規定—イエスを中心として』、教文館、2016年、232,246頁。

16 *πλήν* は新約用例31回中ルカ文書に19回使用、*καὶ ἰδοὺ* はルカ文書に34回使用。

17 Kosch, op. cit., pp. 108-110.

18 Kosch, op. cit., p. 104; H. Klein, op. cit., p. 426参照。なお、マタイ23:24のおよとらぐだの対比の言葉はルカに欠けているが、これはマタイ版Q資料に由来し、ルカの用いたQ資料には記載されていなかったのであろう (Marshall, op. cit., p. 498; ルツ、前掲書、380,394頁)。



ると考えられるが、マタイ版と同様、Q資料においても「清め」の主題を共有する内側と外側の清めに関する言葉（39-41節//マタ23:25-26）の直後に続いているのであろう。

移行句である45節は、弟子以外の人物からイエスへの διδάσκαλε（先生）との呼びかけ（7:40; 9:38; 10:25; 11:45; 12:13; 18:18; 19:39; 20:21,28,39; 21:7参照）や「侮辱する」という意の ὕβριζω（新約用例5回中ルカ文書に3回使用）等のルカ的語彙を含み、ルカの編集句と考えられる<sup>19</sup>。46節は総じてマタイ23:4に並行しているが、人称の相違の他、マタイ版では禍いの言葉の形式をとっていない等の相違点も見られ、どちらがQ資料の内容を反映しているかは明らかではない。47-48節は全体としてマタイ23:29,31に並行しており、簡潔に構成されているルカ版の方が総じて原初的と考えられる。ルカに対応箇所が見られないマタイ23:30の起源は明らかではないが、マタイに特有のマタイ23:32-33はおそらくマタイによる編集的拡大であろう<sup>20</sup>。これに続く49-51節（並行マタ23:34-36）は、一連の禍いの言葉の形式を乱していることから、元来は47-48節とは別個の伝承であったが、すでにQ資料において結合しており、この箇所もルカ版の方が総じてQ資料の内容を保持していると考えられる。もっともマタイ版がそうであるように、おそらくこの箇所はQ資料においてはエルサレムへの嘆きの言葉（ルカ13:33-34 //マタ23:37-39）と結合し、禍いの言葉の末尾に置かれていたが、ルカの文脈ではエルサレムからなお遠く離れた場所が想定されているため、ルカはそれを13章に移行させたのであろう<sup>21</sup>。52節は内容的にマタイ23:13に対応しているが（トマス39a参照）、アオリスト時制（ルカ）と現在時制（マタ）、知恵の鍵の奪取（ルカ）と天国から締め出し（マタ）、禍いの言葉の末尾（ルカ）と冒頭（マタ）等、相違点も多く、その原初形を見極めることは困難である。

結びの53-54節には「律法学者たちやファリサイ派の人々」という通常とは異なる記載の順序に加えて、ここまで用いられてきた νομικός に代えて突然 γραμματεὺς

19 Kosch, op. cit., pp. 73-74参照。

20 E. Heanthen, Matthäus 23. ZTK 48 (1951) 39; ルツ、前掲書、409頁参照。

21 E. Schweizer, *Das Evangelium nach Lukas* (NTD 3), Göttingen 1986, p. 131.

が用いられている等、非ルカの要素も認められ、さらに直後のルカ12:1ともスムーズに接続していないことから、Q資料（ルカ版Q資料）もしくはルカ特殊資料に由来する可能性も考えられる。しかしその一方で、ここにはルカの語彙も含まれており<sup>22</sup>、さらにこの結部がルカによって構成された導入部分（37-38節）と共にこの段落全体を枠づけている点を勘案するなら、何らかの伝承を用いつつも最終的にはルカ自身がこの箇所を編集的に構成したと想定できる<sup>23</sup>。

以上のことからルカは、Q資料（あるいはルカ版Q資料）を主な資料として、ファリサイ派の人々と律法学者たちに対するそれぞれ三つの禍いの言葉が並行する形で構成し、段落全体を食事の場面で枠付けるように編集したのであろう。

## 4. 各節の検討

### 4.1. 序：状況設定（37-38節）

この段落は「さて、彼（イエス）が語っていた時」という直前の段落との結びつきを示す表現で始まり、ルカ11:17以降、群衆に向けて語られていたイエスの一連の教えは、あるファリサイ派の人物がイエスを食事に招くことによって中断することになる<sup>24</sup>。そしてイエスはその招きに応じて食事の席に着いた。ところが、イエスを招いたファリサイ派の人物はイエスが食前に「[手を水に] 浸さなかった」ので非常に驚いた（38節）。βαπτίζω（浸す）はここでは浸礼（バプテスマ）ではなく<sup>25</sup>、祭儀的な手洗いの行為を意味していたと考えられる（マコ

22 καίκειθενは新約用例10回中ルカ文書に9回使用、ἐνεδρεύωは新約ではことば23:21にのみ使用。

23 プルトマン、前掲書、193頁；Fitzmyer, op. cit., pp. 943-944；Schürmann, op. cit., p. 330；Kosch, op. cit., pp. 74-75；Bovon, op. cit., p. 222；Hotze, op. cit., p. 211。

24 ἀριστάωは元来「朝食をとる」という意味であったが（ヨハ21:12,15参照）、後に昼食の意味にも用いられるようになった（田川建三『新約聖書 訳と註2上 ルカ福音書』、作品社、2011年、107頁参照）。もともと、次節で用いられている名詞形のἀριστονは朝食や昼食のみならず食事一般をも意味することから、ここでもいずれの食事であるかを特定することなく「会食する」という意味で用いられているのであろう。

25 T. Zahn, *Das Evangelium des Lucas* (KNT 3), Leipzig/Erlangen 1988, p. 476 n. 69；田川、前掲書、307-308頁；川島、前掲書、231頁に反対。

7:34; ヘブ9:10)。もっとも、これについては旧約律法に記載されておらず、紀元一世紀においてはこの食前の手洗いの規則はまだ一般化していなかったようである<sup>26</sup>。

#### 4.2. 内側と外側の清め (39-41節)

するとイエス (= 「主」) はそのファリサイ派の人物の疑念を見抜いて、「あなたたちファリサイ派の人々は杯や皿の外側は清めるが、あなたたちの内側は強欲と悪に満ちている」と語り出す (39節)。容器の内側が清められている時、外側も清めなければならないかという問いは、当時のユダヤ教の各セクト間で論争されていた主題であった (ミシュナ「ケリム」25:1以下)<sup>27</sup>。このイエスの発言は手洗いに関する直前の記述 (38節) と厳密には適合していないが、両節は「祭儀的清浄」というモチーフによって緩やかに結合している (マコ7:34参照)。

マタイ23:25と同様、ここではτὸ ἔξωθεν (外側) とτὸ ἔσωθεν (内側) が対置されているが、後者にἑμῶνという人称代名詞が付されているルカ版においては容器の外側と内側ではなく<sup>28</sup>、容器の外側とファリサイ派の人々の内側が対置されている。その意味でもここでの対置は厳密なものではないが、容器の外側のみの清めはあり得ないという意味でも、ルカにおいては「杯や皿の外側」という表現も隠喩的にファリサイ派の人々の外側の意味で解すべきであり<sup>29</sup>、ここではファリサイ派の人々の外的・表面的な清さと彼らの心の不純さ (汚れ) との落差が強調されている。

ἀρπαγήは、マタイにおいては容器がこれで満ちている状況について語られていることから「強奪されたもの」の意で解されるが、ルカの文脈では人間の

26 U. ルツ『マタイによる福音書 (8-17章)』小河陽訳、教文館、542-543頁。なお、ヨセフスはエッセネ派の人々が食前に全身を冷水で清めていたと報告している (『ユダヤ戦記』2:129)。

27 さらにJ. Neusner, 'First Cleanse the Inside', *NTS* 22 (1975/76) 486-495参照。

28 H -J, Degenhardt, *Lukas – Evangelist der Armen. Besitz und Besitzverzicht in den lukanischen Schriften. Eine traditions- und redaktionsgeschichtliche Untersuchung*, Stuttgart, 1965, p. 57に反対。

29 H, Maccoby, *The Washing of Cups*, *JSNT* 14 (3-15) 5; 川島、前掲書、232頁。

内面に関わっていることから「強欲」を意味している（16:14; マタ7:15参照）<sup>30</sup>。一方のπονηρία（悪）は何より倫理的・道徳的意味をもち（cf. マタ：ἀκρασία [放縦]）、新約の悪徳表にも用いられている（マコ7:22; ロマ1:29参照）。すなわち、自分たちの外側（外面）にのみ神経を使い（11:42; 16:15参照）、その内側（心）は「強欲と悪に満ちている」（マコ7:21-22//マタ15:18-19参照）ファリサイ派の偽善的な姿勢がここでは問題視されているのである<sup>31</sup>。

続けてイエスは「愚か者たちよ」と厳しく語りかけ（cf. マタ23:24:「盲目のファリサイ人よ」）、「外側を造られた方は内側も造られたではないか」と修辞疑問文によって外側と内側の統一性を強調するが（40節）、ここでの「造られた方」は人間ではなく<sup>32</sup>、明らかに創造者としての神を指している。また、ここでファリサイ派の人々が「愚か者たち」と見なされているのは、外的な清浄規定さえ満たしていれば神の意志を実行していることになると考え、神が外側のみならず内側も創造したことを見落としていたためであろう。すなわち、まさに神が外側と内側の全体を創造したように、清めも全体的なものでなくてはならないのである。

さらにイエスはπλήν（むしろ）という表現を用いて、「内にあるものを施しとして〔人に〕与えなさい」と要求する（41節）。ἐλεημοσύνηは新約では常に「施し」の意で用いられ、新約ではマタイ6:2-4以外ではルカ文書にのみ計10回用いられている。ここでの「施し」への言及は唐突な印象を受けることから、一部の研究者はアラム語が誤訳された可能性を指摘しているが<sup>33</sup>、この点は明らかではない<sup>34</sup>。マタイの並行箇所では「まず、杯の内部を清めなさい。そうすれば外部も

30 H. Moxnes, *The Economy of the Kingdom. Social Conflict and Economic Relations in Luke's Gospel*. Philadelphia 1988, p. 111 n. 7.

31 このファリサイ派批判の並行例としてエッセネ派によるファリサイ派批判（モーセ昇天7:7-9）が挙げられる。

32 Manson, op. cit., p. 269; E. Klostermann, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 1975, p. 130に反対。

33 Marshall, op. cit., p. 496; G. B. ケアード『ルカによる福音書註解』藤崎修訳、教文館、2001年、187頁。

34 Fitzmyer, op. cit., p. 947参照。

清くなる」とあり、祭儀的な清めも断念されていないが<sup>35</sup>、ルカにおいてはもはやそれは問題にされていない。その意味でもこの要求は文脈を乱しているように思えるが、おそらく対照的な意味をもつ39節のἀρπαγή（強欲）と関連しているのであろう。

「内にあるもの」（τὰ ἐνόντα）はマタイ23:26の「杯の内部」（τὸ ἐντὸς τοῦ ποτηρίου）に対応しているが、この言葉が具体的に何を指しているかは明らかではない。一部の研究者はこの表現を39節の「内側」（τὸ ἔσωθεν）との関連からファリサイ派の人々の内面、すなわち「心の内側」や「内なる人」、あるいは「（あなたたちの）内側にあるもの」と解しているが<sup>36</sup>、この理解では、彼らの心の内にある「強欲と悪」がどのように施しとして用いられるのかが説明できない。また他の研究者は、この表現を「手元にあるもの」、「彼らが所有しているもの」の意で解そうとするが<sup>37</sup>、この見解も十分に根拠づけられない。むしろこの表現は、マタイの並行箇所と同様、容器の中身、すなわち飲み物や食べ物の意で解すべきであろう<sup>38</sup>。

これに続く「そうすれば見よ、あなたたちにとってはすべてのものが清くなる」という説明句は清浄規定を明らかに批判している。内側が清められれば外側も清められるのだから（11:34参照）、祭儀的な清めに関する問いはもはや重要ではない。それゆえ、ここでは何より施し行為によって達成される内側（すなわち心）の清さが問題になっており、外側と内側双方の清めについて述べる39-40節の内容とは厳密に対応していない（シラ3:30参照）。ルカはここで、強欲と悪でその心が満たされているファリサイ派の人々に施しを要求することによって、この箇所の強調点を祭儀的な清めから倫理的な清めへと移行させ、祭儀的な清めに

35 ルツ、前掲書、403頁。

36 Bovon, op. cit., p. 228; レングストルフ、前掲書、326頁; 川島、前掲書、233-234頁参照。

37 Zahn, op. cit., p. 480; W. Wiefel, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1988, p. 228.

38 W. Grundmann *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, p. 247; Schneider, op. cit., p. 275; Fitzmyer, op. cit., p. 945; Schweizer, op. cit., p. 131; A. Plummer *Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to St. Luke* (ICC), Edinburgh 1989, p. 311; Schürmann, op. cit., p. 312他。

関わる行為を倫理的・社会的行為に置き換えている<sup>39</sup>。

### 4.3. ファリサイ派の人々に対する禍いの言葉（42-44節）

ここからファリサイ派の人々に対する三つの禍いの言葉が語られるが、最後の言葉（44節）のみは直前の箇所而言及された清めの主題を扱っている。最初の言葉（42節）は彼らが「薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一税」は献げても「正義と神への愛」は疎かにしていることを問題にしているが、前者は外側の清めに、後者は施し行為にそれぞれ対応しており、また注目すべきことに、十分の一税と施し行為は関連づけられていない。

神殿への十分の一税は、旧約律法においては穀物や果実、牛や羊、ぶどう酒、オリーブ油等がその対象として定められていたが（レビ27:30-33; 申14:22-29）、ミシュナにおいては草木等を含めてあらゆる収穫物に拡大された（ミシュナ「マアセロート」、「マアセル・シェニー」参照）。ファリサイ派と律法学者の双方に語られているマタイ版においては「薄荷、いのんど、茴香」が十分の一税の対象として挙げられているのに対し（マタ23:23-24）、ルカは「いのんど、茴香」の代わりに「芸香やあらゆる野菜」を挙げており、より包括的なリストになっている。比較的多くの研究者はこれをルカの編集に帰しているが<sup>40</sup>、相異なるQ資料（マタイ版Qとルカ版Q）に由来するとも<sup>41</sup>、両福音書記者の編集の結果<sup>42</sup>とも考えられる。ルカはまた、彼らが疎かにしているものとして、マタイ23:23の（律法の中で最も重要な）「正義、慈悲、誠実」に対して「正義と神への愛」を挙げている。両者に共通するἡ κρίσιςは「裁き」とも解しうるが（岩波訳他）、倫理的な「正義」の意で解するなら、ルカ版の記述は二つの重要な戒め（神へ

39 川島、前掲書、234頁に反対。この施しの要求はファリサイ派に向けられているが、他の福音書に同様の記述は見られず、ヨセフスの『ユダヤ古代誌』18:12には、むしろファリサイ派が贅沢を避け、簡素な生活を好んでいたと記されていることから、ここではファリサイ派の歴史の実像ではなくルカのファリサイ派像が描かれており、ルカは彼の時代の富めるキリスト者に施し行為を通して清められるように要求しているのであろう。

40 カルペパー、前掲書、319頁; Eckey, op. cit., p. 548他。

41 Marshall, op. cit., p. 497.

42 Schürmann, op. cit., p. 315.

の愛と隣人愛)に逆順で対応している<sup>43</sup>。

このように、ここでは十分の一税以上に正義や神への愛が重要であると述べられるが、その一方で「もとより前者(十分の一の献げ物)も疎かにしてはならない」という末尾の記述は、十分の一税そのものが否定されているわけではないことを示している(コヘ7:18参照)。

第二の禍いの言葉は、会堂では最上席に座り、公共の間では人から挨拶されることを好む彼らの名誉欲に関わっている(43節)。この箇所はマタイ23:6-7の他、マルコ12:38b-39及びルカ20:46にも並行記事が見られ、それらの箇所では律法学者が批判の対象になっているが、事実この批判はファリサイ派よりもむしろ律法学者に適合している。「好む」という表現に関して、マタイ23:6のφιλέωに対してἀγαπάωを用いるルカは、直前の第一の禍いの言葉とより緊密に関連づけると共に、神よりも自らの名誉を重んじるファリサイ派の人々の傲慢な姿勢をより鮮明に描き出している。ここではこのように、自分たちの義と栄光を追い求めようとする彼らの姿勢が問題視されており、真の敬虔は他人から賞賛を求めることではなく、世間の賞賛を博することへの執着は前述の正義や神への愛に逆行することが示されている(マタ6:1; マコ12:38-39参照)<sup>44</sup>。

最後の禍いの言葉にはファリサイ派は直接名指しされていないが、引き続き彼らに向けて語られている(44節)。ここではファリサイ派の人々が目に見えない墓にたとえられ、その上を行き交う人々はそのことに気づかないと述べられる。死体との接触は他人を汚すと考えられていたため(レビ21:1-4; 民19:11-22)、墓は不浄な場と見なされ、誤って接触するのを避けるため墓にはしるしがつけられていた。この言葉のマタイ版はすべての通行人がそれに気づくように墓に漆喰を塗る(白く塗る)習慣に言及しており(マタ23:27-28)、律法学者やファリサイ派は、漆喰を塗られた墓のように外側はきれいにしている(使23:3参照)内側は汚れに満ちていると、直前の内側と外側の清めの言葉(マタ23:25-26)と

43 Schürmann, op. cit., p. 314.

44 マタイ版では禍いの言葉の形式は用いられておらず、この言葉の直後には「先生」(ῥαββί)と呼ばれてはならないという主旨の発言が続いている(マタ23:8)。



同様、内と外との対比が強調されている。一方のルカにおいては墓のイメージは逆の意味で用いられており、自らの外側を飾ろうとするファリサイ派の人々の邪悪な本質は隠されて人目につかないだけに誰もそれに気づかず、結果的に周囲の人々を汚すことになる、その本質のみならず、それがもたらす実害についても述べられている<sup>45</sup>。

#### 4.4. 移行句：ある律法の専門家の反論（45節）

ファリサイ派の人々に対する三つの禍いの言葉が述べられたあと、会食の場で話を聞いていた律法の専門家たちの一人が口を挟んで、それらの批判は自分たちにも該当し、自分たちをも侮辱することになるとイエスに抗議する。律法の専門家たちの一部はファリサイ派に属しており、彼らの律法解釈がファリサイ派の実践活動に多大な影響を及ぼしていたことは十分に考えられる。「先生」との呼びかけはイエスに対する敬意を示しているのではなく、彼はこの時点ですでにイエスに敵意を抱いていたと考えるべきであろう。

#### 4.5. 律法の専門家たちに対する禍いの言葉（46-52節）

そこでイエスはその抗議に直接答えるのではなく、今度は律法の専門家たちに対して三つの禍いの言葉を語り始める。最初の禍いの言葉は、彼らの律法解釈とそれに伴う法的な要求が人々に背負いきれない重荷を負わせており（使15:10参照）、その一方で彼ら自身は「指一本でもその重荷に触れようとしない」点に向けられる（46節）。後半部分については、人々がその重荷に苦しんでいるのを彼らがまったく助けようとしないことが指摘されているのか<sup>46</sup>、それとも彼ら自身がまったくその重荷を担おうとしないことが言われているのか<sup>47</sup>、明らか

45 カルペパー、前掲書、319頁。

46 Manson, op. cit., pp. 100-101; Grundmann, op. cit., p. 249; Fitzmyer, op. cit., pp. 945-946, 949; Nolland op. cit., p. 666; C. H. Talbert. *Reading Luke: A Literary and Theological Commentary on the Third Gospel*. Georgia 2002, p. 149; Eckey, op. cit., p. 555.

47 J. M. Creed, *The Gospel according to St. Luke: The Greek Introduction, Notes, and Indices*. London 1953, p. 167; Schürmann, op. cit., pp. 318-319; Marshall, op. cit., p. 500; Bovon, op. cit., p. 233; Wolter, op. cit., p. 434.



ではない。禍いの言葉の形式を伴わないマタイの並行箇所では、彼らは言うだけで実行しないと指摘するマタイ23:3の直後に続いていることから後者の見解が妥当であると考えられるが<sup>48</sup>、ルカの場合も同様であるなら、彼らの言行不一致が批判されていることになる（ガラ6:13参照）。おそらくここでは双方の意味がこめられていると考えられるが、いずれにせよ、彼らが人々に課す過大要求と彼ら自身の実践の欠如との隔たりが問題にされている。

次の禍いの言葉（47-48節）には律法の専門家たちへの呼びかけは記載されていないが（44節参照）、ここでも律法の専門家たちが対象とされていることは明らかである。彼らが預言者たちの墓を建てているという発言は、イエスの時代にアモス、ハバクク、ダビデ等の記念堂（塔）が建てられたこと（使2:29参照）とも関連しているのであろう<sup>49</sup>。しかし、彼らが預言者たちの墓を建てていること自体、自分たちの先祖による預言者殺害を証明することになり、彼らはその悪行に同意しているところでは述べられている。墓の建設は通常はその故人に対する敬意を示す行為と見なされるだけに、彼らによる預言者たちの墓の建設と彼らの先祖の預言者殺害がどのような意味で対応しているかがここでは問題となる。墓の建設によってかつて殺害された預言者たちが今も死んだ状態にあることを確認している（祝っている）という皮肉がこめられているという可能性も否定できないが<sup>50</sup>、ここではおそらく、預言者たちの墓を建てることによって彼らとの連帯と自らの敬虔さを誇示しようとしながら現実には預言者たちの言葉に聞き従おうとしない彼らの偽善的な姿勢が、先祖の預言者殺害に対応していると見なされているのであろう<sup>51</sup>。すなわち、彼らの先祖が預言者たちを殺害し、彼ら自身はその墓を建てることによって、彼らは先祖の悪行を完成させているというのである。そしてまた、この言葉を伝承した最初期のキリスト教

48 ルツ、前掲書、363頁参照。

49 A. Stöger, *Das Evangelium nach Lukas*. I, Düsseldorf 1990, p. 334; 三好迪「ルカによる福音書」高橋虔他監修『新共同訳 新約聖書註解I』、日本キリスト教団出版局、1991年、329-330頁。

50 Manson, op. cit., p. 101; シュヴァイツァー、前掲書、610頁; Nolland, op. cit., p. 667.

51 Grundmann, op. cit., p. 249; D. L. Bock, *Luke*, Vol. 2: 9:51-24:53 (ECNT), Michigan 1996, p. 1120; Wolter, op. cit., p. 435.

会が、ここからイエスの殉教を連想したことは十分に考えられる<sup>52</sup>。なお、マタイ版では預言者たちの墓を建てることと並んで義人たちの記念碑を飾ることが挙げられ（マタ23:29d）、「もし私たちが自分たちの先祖の時代にいたなら預言者の血について彼らの共犯者にはならなかったであろう」（マタ23:30）という彼ら（律法学者たちとファリサイ派の人々）の発言が記されている。

預言者の墓に関する禍いの言葉に続いて、一連の禍いの言葉の中に挿入される形で、「神の知恵」による証言として「私は彼らの中に預言者たちや使徒たちを遣わす。しかし彼らはそのうち〔のある者〕を殺し、迫害する」と出所不明の引用句が語られ（49節）、その直後にはこの時代に対する裁きの言葉（50-51節）が続いている。「神の知恵」の意味内容に関して、確かに新約においてはイエスを「神の知恵」と見なす証言も認められるが（I コリ1:24,30; 2:4; コロ2:3）、ルカ自身がイエスと知恵を同一視したとは考えられず<sup>53</sup>、また旧約では知恵はしばしば神のイメージで捉えられていることから、ここではイエス自身ではなく<sup>54</sup>神自身と見なすべきであろう<sup>55</sup>。なお、「神の知恵」への言及がない並行箇所のマタイ23:34ではイエス自身の言葉として語られ、派遣する主体としての「私（ἐγώ）＝イエス」が強調されており、さらにマタイ版では、ルカの未来形に対して現在形動詞が使用され、派遣先に関してはルカの三人称複数形に対して二人称複数形を用いられ、その「あなたたち」が派遣される預言者たちを殺し、十字架につけ、会堂で鞭打ち、町から町へと迫害すると、より具体的に述べられている。

派遣される人々については、マタイの「預言者たち、知者たち、学者たち」に対してルカでは「預言者たちや使徒たち」となっている。マタイにおける「知者たち」（σοφοί）はQ資料に由来し<sup>56</sup>、「学者たち」も、律法学者たちを激しく非難する文脈にわざわざマタイが同一語（γραμματεῖς）を異なる意味で編集的に

52 Bovon, op. cit., p. 234.

53 コンツェルマン、前掲書、192頁、注20。

54 W. Schmithals, *Das Evangelium nach Lukas* (ZBK 3.1), Zürich 1980, p. 140; Schürmann, op. cit., p. 323に反対。

55 Fitzmyer, op. cit., p. 949; Bovon, op. cit., p. 235; Bock, op. cit., pp. 1221-1222.

56 ルツ、前掲書、439頁。

挿入したとは考えにくいことからQ資料に遡ると考えられ、おそらくルカも混乱を避けるため、*γραμματεῖς* (11:53参照) を肯定的に捉えるこの箇所をそのまま受け入れなかったのであろう。また、預言者たちと使徒たちの組み合わせはキリスト教文書に特有であり (Ⅰ コリ12:28; エフェ2:20; 3:5; 4:11; Ⅱ ペト3:2; 黙18:20)、多くの場合は「使徒、預言者」の順で記され、キリスト教の使徒と預言者を意味している。しかしここでは、51節の内容からも明らかなように、かつて派遣された「旧約預言者」とキリスト教宣教者の「使徒たち」をそれぞれ意味し<sup>57</sup>、それによってイスラエルとキリスト教会の緊密な結びつきを示しており、さらに使徒たちへの言及は彼らの将来の殉教 (使12:2-5参照) をも暗示しているのであろう<sup>58</sup>。

さらにここでは、世界の最初から流されたすべての預言者たちの血について「この時代から〔代償を〕要求される」と述べられる (50節)。「流された……血」という表現は暴力行為による死を意味しており (創9:6; 民35:33; 使22:20)、完了形の使用はこの殺害に対する報復が今なおなされていないことを示唆している。*ἐκζητέω τὸ αἷμα* (血について〔代償を〕要求する) という表現は七十人訳聖書に由来し (創9:5; 42:22; サム下4:11; エゼ3:18,20; 33:6,8; 詩9:13)、元来は、殺害された者の血 (命) の責任は殺害者に求められ、彼は自らの命をもってその責任を負わねばならないという理解を示していた<sup>59</sup>。また「この時代」はイエスと同時代のユダヤ人全体を指しており (11:29-32参照)、その意味でもここで批判の対象は、律法の専門家たちからユダヤ人全体へと拡大している。なお、マタイの並行箇所では「預言者たちの血」ではなく「義人の血」が問題となっており、ルカ版の「血について代償を要求される」に対して「すべての義人の血があなたたちの上に臨む」 (マタ23:35) と記されている。

57 G. Klein, *Die Verfolgung der Apostel*, Luk 11:49. H. Baltenweiser & B. Reicke (Hg), *Neues Testament und Geschichte* (FS O. Cullmann), Zürich/Tübingen 1972, p. 121; H. Klein, op. cit., p. 433; Wolter, op. cit., p. 435.

58 G. Klein, op. cit., p. 121; Schneider, op. cit., p. 276; カルベパー、前掲書、320頁; Eckey, op. cit., p. 557; H. Klein, op. cit., p. 433.

59 Wolter, op. cit., p. 436.

続く51節で、前節の「すべての預言者たちの血」が具体的にはアベルの血（創4:10; ヘブ12:24参照）からゼカリヤの血を指していることが明らかになる。アベル（創4:8-10）は預言者ではないが、このような記載の仕方は、旧約の人物を何らかの意味で預言者と見なそうとするルカの傾向に適合している<sup>60</sup>。また「祭壇と神殿の間で」殺されたゼカリヤは、特にルカ版では（同様に預言者ではない）祭司ヨヤダの子のゼカリヤと同定され（代下24:20-22）、歴代誌下の記述によると、彼はヨアシュ王の時代（前840-801）に「主の神殿の庭で」石で打ち殺された（代下24:21）。ここで彼ら二人に言及されているのは、両者の殺害がイスラエル史全体における原型的な殺人であり、さらには、当時のヘブライ語聖典では創世記と歴代誌はそれぞれ最初と最後の文書であったという意味で旧約聖書の記述における最初と最後の殺人と見なされたためと考えられるが、紀元一世紀にヘブライ語聖書の順序が確定していたかどうかは明らかではない<sup>61</sup>。

51節後半部でも「この時代から〔代償を〕要求される」という前節と同様の表現が繰り返されているが、ここでは「そうだ、私はあなたたちに言うておくが」という表現によって導入されていることから、イエス自身がこの点を認証していたことを強調している。その意味でも、先行する29-36節では警告と悔い改めへの呼びかけが記されていたのに対し、ここでは禍いの言葉による裁きが告知されており<sup>62</sup>、しかもその対象はあらゆる世代の人々に拡大している。おそらくルカは、ここで紀元70年のエルサレム陥落を念頭に置いているのであろう。

最後の禍いの言葉（52節）は、律法の専門家たちが「知識の鍵」を取り上げることにより、自分たちもその中に入ろうとせず、かつ人々がその中に入ろう

60 Fitzmyer, op. cit., p. 951.

61 マタイの並行箇所では「(あなたたちが……殺した) バラキアの子ゼカリヤ」(マタ23:35)と記されており、ゼカリヤは紀元66年に神殿の中で熱心党員によって殺害されたとされる「バレイスの子ザカリアス」(ヨセフ『ユダヤ戦記』4:334-343参照)もしくは十二小預言者の一人の「ベレクヤの子ゼカリヤ」(ゼカ1:1,7)を指しているとも考えられるが(イザ8:2参照)、後者については殺害されたわけではない。マタイに特有のこの表現は歴史的事実に合致しないことからマタイの編集的付加とは考えにくくQ資料に遡るのであろう。なお古代の解釈者たちは、神殿と祭壇への言及からゼカリヤを洗礼者ヨハネの父ザカリアと見なしている(ヤコブ原福23-24参照)。

62 Schürmann, op. cit., p. 304.

とするのを妨げてきたことが問題にされる。「知識の鍵」はおそらく知識に至る鍵を意味しており、ルカ1:77の「救いの知識」との関連からもここでは救いに至る扉の鍵が意味されているのであろう<sup>63</sup>。並行箇所のマタイ23:13ではこの言葉は一連の禍いの言葉の冒頭に位置づけられ、天の国の門を閉ざすことについて語られているが、ルカが自らこのような難解な表現を用いたとは考えにくいことから、Q資料の内容を保持しているのはマタイ版ではなく<sup>64</sup>ルカ版であると考えられる<sup>65</sup>。ここではこのように、律法の専門家たちは神認識の鍵（救いの知識）を所有しながらもそれを用いようとせず、それどころか人々がその認識を得ようとするのを阻止しようとしているという理由から批判されている。

#### 4.6. 結び：イエスの退去と律法学者とファリサイ派の敵意（53-54節）

一連の禍いの言葉を語り終えるとイエスはその場から立ち去るが、律法学者たちやファリサイ派の人々は彼に対して激しい敵意を抱き、様々なことに関してイエスに質問を浴びせ始め、何とかして彼の言葉じりをとらえようとしていたという。なお、ここでは律法学者がファリサイ派の人々の前に位置づけられているが、このことは、ここでは特に律法学者が主導権を握っていたことを示唆しており<sup>66</sup>、ファリサイ派ではなく律法学者がイエス殺しに加担したというルカの理解にも対応している<sup>67</sup>。ここではまた、イエスがその場から立ち去った後に敵意を抱いた律法学者たちやファリサイ派の人々が（すでにその場にいないはずの）イエスに質問を浴びせ始めたという不可解な描写になっているが、イエスが立ち去った直後に彼らもその後を追ったという状況が前提にされていると考えるべきであろう<sup>68</sup>。

63 Wolter, op. cit., p. 436.

64 Schneider, op. cit., p.276; Schürmann, op. cit., pp. 328-329.

65 ルツ、前掲書、382頁; Hotze, op. cit., pp. 205-206.

66 嶺重、前掲論文「イエスと律法学者」、65頁参照。

67 同書、65-68頁。

68 そのような不可解さのゆえに、一部の後代の写本(A, W, Θ, Ψ)は冒頭の「彼がそこから出て行くと」を「彼が彼らにこのことを言う」と書き換え、イエスが引き続きその場に留まっていたかのように表現している。

## 結び：ルカ11:37-54の文学的機能と今日への使信

あるファリサイ派の人物宅での会食という場面設定のもとに構成されているこの段落では、まず外的（祭儀的）な清めと内的（倫理的）な清めとの対立が問題にされ、人間の内と外の双方を清める内的な清めが重要視され、それは施し行為の要求へと具体化されていく。ここで展開されている祭儀的な清めの規定に対する批判は、おそらくルカの時代の異邦人宣教と密接に関わっているのであろう。

ここではまた、ファリサイ派と律法学者に向けて、形式主義、名誉欲、偽善的態度、他者への強要や妨害等に関する様々な禍いの言葉が連ねられているが、ファリサイ派の人々に対する批判は主に清めの問題や日常的な実践に関わっていたのに対し、律法の専門家に対する批判は総じて彼らの律法解釈や生きる姿勢に向けられている。とはいえ、両者に対する非難の内容は厳密には区分されておらず、51-52節においてその対象が「この時代」に拡大されていることにも示されているように、ルカはこれらの非難の言葉をファリサイ派と律法学者の区別を越えて、ユダヤ教指導者のみならず、広く彼の時代のキリスト者にも向けようとしている。

そしてまた、ここに挙げられている禍いの言葉の内容は、今日の読者にとっても決して他人ごとではない。表面だけを取り繕う中身のない振る舞いと言行不一致、他人からの評価への過度の捕われと自己顕示欲や独善主義、責任回避と責任転嫁、困窮する隣人に対する無関心や傲慢な態度、他人からの忠告の無視と自己正当化等々である。あるいはまた、今日しばしば問題にされている強者の立場にいる者（権力者）によるハラスメントの実態もまさにこれらの振る舞いや姿勢と密接に関わっているが、現実には誰もがそのような弊に陥る危険性をもっており、おそらく最大の問題は、これらのことを自分とはまったく無縁な他人ごとと思ひこみ、自分自身を顧みようとしない点にあるのだろう。その意味でも、この禍いの言葉は現代の読者に対しても、自らのあり方を真摯に省みるように警告している。